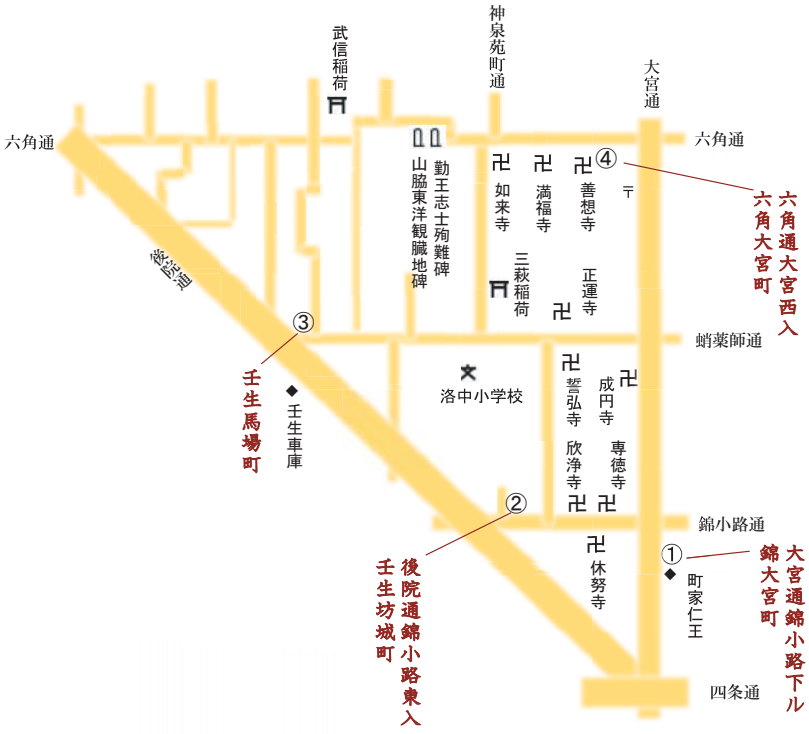
第24回　四条大宮を起点として

■ 大宮通を北へ

四条大宮は、嵐電（京福電車嵐山線）のターミナルになっているところ。かっては、大阪からくる阪急もここで終点になっていました（現在は河原町まで伸延）。四条大宮から、後院通が西北方向に斜めに走っています。京都ではめずらしく斜めなのは、撤去された市電の線路のあとです。途中に、市電の壬生車庫がありました（施設は、現在でもバス車庫として運用されています）。四条大宮は、後院通を西北方向に向かう路線、四条通を東へ向かう路線、大宮通を南に向かう路線の分岐点でした（唱和四七年〔一九七二〕廃止、市電の全線廃止は、昭和五三年〔一九七八〕）。また、四条通を西に向かうトロリーバス（無軌道の電車）の起点でもありました（昭和四四年〔一九六九〕廃止）。このような経緯から、現在でも庶民的な繁華街として健在です。

今回は、四条大宮から、まず大宮通を北上しましょう。居酒屋、食堂、パチンコ店などがならんだ一角、路地の奥にも居酒屋が並んでいます。錦小路通に至る手前に、仁王が護衛している町家があります。寺院の仁王は見慣れていますが、町家に仁王とは。吽形の仁王の脇に久邇洋裁学校がスポンサーになった町名看板「大宮通錦小路下ル錦大宮町」①が掲げてあります。錦大宮町



町名看板の所在（四条大宮の北界隈）

は現在中京区であるのに「下京区」となっているので、この看板は中京区の分離新設（昭和四年〔一九二九〕）以前に設置されたことがわかります。仁丹の町名看板に匹敵するくらいの古さです。仁丹の町名看板の「下京區」が右横書で、「區」が旧字体になっていることに比較して、この看板の「下京区」が左横書になっていることと、「区」が略字体になっていることがおもしろい。当時は洋裁といえばハイカラであった時代でしょうから、洋裁学校の宣伝となれば、やはり洋風に左横書。対抗意識があったかどうかはわかりませんが。

■休務寺

この近辺も、実に寺が多い。錦小路通に北面して、休務寺（中京区錦小路大宮西入錦大宮町）。

『拾遺都名所図会』巻一でも所在地は同じで、次のように記されています。

休務寺　錦小路通大宮の西にあり。浄土宗西山派。
開基は貢空景林上人。寛永十年の草創なり。
本尊阿彌陀佛　八幡宮の神作。立像、三尺五寸計。四十八願巡の第二番なり。

草創の寛永一〇年は、一六三三年です。休務寺は、京都大学付属図書館蔵の洛中絵図（中井家絵図・書類七四、http://hdl.handle.net/2433/77614、寛永後万治前〔一六二四〜一六五八の間、一六四二頃〕）によって同じ場所に存在すること

町家の門前の仁王

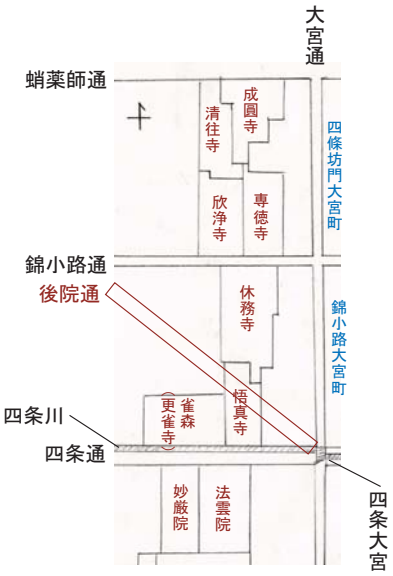
大宮通　錦小路下ル錦大宮町　①

休務寺

故法眼石田幽汀之墓の碑

が確かめられますので、時期的に辻褄があっています。「四十八願巡」は、阿弥陀仏の四十八願をめぐる霊場があったと解釈できますが、詳細はわかりません。

後院通の位置関係を示すために、洛中絵図の一部を切り取った略図を示します。おもしろいのは、休務寺の西南、四条通に南面する場所が、「雀森」となっていて、四条川が流れていることです。「雀森」の四条通を挟んで向かいは、妙厳院（現在も同じ場所にあります）となっています。「雀森」とは、第23回で引用した壬生寺の鳥瞰図（『都名所図会』巻二、安永九年〔一七八〇〕）の遠景に描かれている更雀寺の別名です。したがって、市電の敷設のために開かれた後院通は、休務寺と更雀寺（寛永年中にこの地に移転。さらに、昭和五二年〔一九七七〕に岩倉に移転）の間を通っているということになります。



洛中絵図（一六四二頃、京都大学付属図書館蔵）の部分図に後院通を書き加えた略図

この略図で、後院通とまともに重なってしまった悟真寺は、太秦に移転しました。現在の所在地の最寄り駅は、嵐電の太秦。道を挟んで広隆寺の東にあります。この寺は、円山応挙の墓所です。円山応挙については、本シリーズ第10回で触れましたのでご覧ください。

さて、休務寺の説明に戻りましょう。門前の「豊蔵山休務寺」の石標の傍らに、「故法眼石田幽汀之墓此寺内ニ在」の石碑が建っています。石田幽汀（享和六年〔一七二一〕～天明六年〔一七八六〕）は、江戸中期の画家。円山応挙の最初の師。狩野派から分かれた鶴沢派を学びましたが、のちに写実性を加味した装飾的な

画風をたて一派をなしました。幽汀の次男の遊汀（？　～寛政五年〔一七九三〕）、三男の友汀（宝暦六年〔一七五六〕～文化一二年〔一八一五〕）も画家で、墓は同じ休務寺にあります。漢字は違っても、読みはすべて「ゆうてい」でこんがらがってしまいます。友汀については、文化一〇年〔一八一三〕版『平安人物志』の画家の項に、次の記載があります。

石田叔明　不明門雪駄屋町　石田友汀

錦小路通を挟んで休務寺の向かいには、欣浄寺（浄土宗）と専徳寺（浄土宗）。この二つの寺も、上述（部分図）の洛中絵図（京都大学付属図書館蔵）の同じ場所に記載されており、一六四二年頃には、この場所に建っていたことがわかります。

後院通との変則交差点から錦小路通を少し東、路地の入り口に町名看板「後院通錦小路東入壬生坊城町」②があります。区名は「中京区」です。スポンサーはてっぽう寿司。どのような雰囲気の場所に貼ってあるか示すために路地が見えるようにトリミングをしました。看板自体も変色が激しいこともあって、写真では文字が判然としませんが、がまんしてください。この看板は錦小路に面しているので、「面している通りを先に書く」という町名表示の原則には反しています。まあ、後院通が斜めであることで、例外も許されるということでしょうか。後院通を住所表示に使っていますので、この看板は後院通の開通（市電の開設、明治四五年〔一九一二〕）、さらには中京区の分離新設（昭和四年〔一九二九〕）以後に設置されたものですが、本シリーズで主に取りあげている仁丹の町名看板も市電の開設とほぼ同時期に設置されていますので（第13回参照）、もしあるとすれば、原則に従って「京下區」錦小路通後院東入壬生坊城町」としたはずで、このあたりに仁丹の町名看板が見つかればおもしろいのですが。

後院通　錦小路　東入　壬生坊城町　②

■　成円寺・誓弘寺

大宮通に東面して、成円寺（中京区大宮通蛸薬師下ル四坊大宮町）。成円寺も、洛中絵図（京都大学付属図書館蔵、上掲の後院通を示した略図参照）の同じ場所に記載されています。したがって、一六四二年頃には、この場所に建っていたわけです。

門前には、「洛陽三番正観音六番地蔵尊成圓寺」の石標が建っています。境内には地蔵堂があり、献灯の文字は「延命地蔵大菩薩」と読めま

成円寺

成円寺の石標

地蔵堂

す。洛陽四十八願所地蔵尊では、休務寺の万人講地蔵が五番、同じく延命地蔵が六番札所となっています。一つの寺で、二つの札所となっているのは例外中の例外です。再調査が必要ですが、成円寺の延命地蔵と混同したのかもしれません。

成円寺の西裏は、蛸薬師通に北面して誓弘寺（中京区蛸薬師通大宮西入四坊大宮町）。西山浄土宗。

誓弘寺

後院通の位置を示した略図（京都大学付属図書館蔵洛中絵図に基づく上記のもの）では「清往寺」と記載していますが、原図からは「往」の字がうまく読み取れないので、「せいこうじ」と「せ

いおうじ」の読みが似通っていることからの当て推量です。別の絵図では、「法高寺」となっていることもあります。南北の路地を挟んで西側は洛中小学校。

■ 正運寺、洛陽観音二十六番

蛸薬師通を挟んで、誓弘寺の向かいには正運寺（中京区蛸薬師通大宮西入因幡町）。正運寺も、洛中絵図（京都大学付属図書館蔵）でも同じ場所に記載されています。したがって、一六四二年頃には、この場所に建っていたわけです。南面する山門の向かって左手には、「十一面観世音」と彫り込んだ門標が建っています。東側の側面の文字は、「廿六ばん正うんじ」と読めます。

『拾遺都名所図会』巻一には、次のように説明されています。

正雲寺　四条坊門大宮の西にあり。浄土宗、黒谷に屬す。寛永十年の草創なり。本尊阿彌陀佛。開基は深譽上人。
観音堂。寺内にあり。本尊十一面観音は、和州長谷寺の本尊と同木同作なりとぞ。洛陽観音巡りの第二十六番なり。

四条坊門は、現在の蛸薬師通のこと。洛陽三十三所観音巡礼が最近復活したようで、そのホームページによれば、正運寺（http://www.rakuyo33.jp/26.shtml）の御詠歌は、次の通り。

ながらへばさりともひらくしょううんぢ
いのちやのりのたからなるらん

正運寺

門標

創建は慶長五年〔一六〇〇〕としていて、『拾遺都名所図会』記載の寛永十年〔一六三三〕とは少しだけ違います。現在の建物は天明の大火（天明八年〔一七八八〕）以後の再建。

洛中小学校をすぎて、蛸薬師通を西進すると、後院通に出る直前で町名看板「壬生馬場町」③があります。上部の「下京區」の文字は、はっきりしないので、下京区から中京区に変わったときに消された可能性があります。別のスポンサーのものも貼ってありますので、両方の看板の出現状況も示します。

壬生馬場町（みぶばんばちょう）③

■　六角通沿いの寺々

洛中小学校北の丁字路から神泉苑町通（旧櫛笥通）を北へ進みますと、東側に「三萩稲荷大明神」があります（「萩」の字がはっきりしないので、他の名称かもしれません）。因幡町内の鎮守とおもわれますが、由来は不明です。

六角通に出ると、東南角に北面して如来寺（中京区六角通大宮西入因幡町）。浄土宗。門前には、「信州善光寺如来一體分身之本尊如来寺」と彫り込んだ門標が建っています。開基・創立は不詳。寛永一三年〔一六三六〕に念故上人の再興と伝えられています（『京都市の地名』）。

三萩稲荷大明神

ただし、上述の洛中絵図（京都大学付属図書館蔵、一六四二年頃）には記載されていません。洛中絵図の元図の年代を繰り上げるか、如来寺の再興年を繰り下げるかのどちらかですが、情報不足でどちらとも決めかねます。天明の大火に類焼、その後再建。

その東隣は満福寺（中京区六角通大宮西入三条大宮町）。西山浄土宗。寺伝では、創建は元和四年〔一六一八〕で開山は鏡空上人（『京都市の地名』によれば、創建は元和九年〔一六二三〕で、開基は眼誉）。天明の大火の後、寛政七年〔一七九五〕に再建。平成一七年〔二〇〇五〕に山門や本堂を修復していますので、真新しい外観です。昭和四二年〔一九六七〕に開基三五〇年を記念して、山号・院号を改めて、「加賀山六度満行院満福寺」としました。「六度満行」の六度とは六波羅密のことで、布施（ふせ）、持戒（じかい）、忍辱（にんにく）、

如来寺

精進、禅定、智慧を差します。六度をすべて修めること（満行）により、仏の道をきわめることができます。満福寺では、「六度満行」を略して「六満」と呼んでおり、六満保育園、六満こどもの家（夜間保育）などを経営しています。本尊は、運慶作と伝える阿弥陀如来。十一面観音菩薩立像（藤原時代末期）、毘沙門天立像（鎌倉時代末期）、地蔵菩薩立像（室町時代初期）。

■ 善想寺・泥足地蔵

さらに東隣は、善想寺（中京区六角通大宮西入三条大宮町）。浄土宗。創建は天正一〇年〔一五八二〕。開山は法春上人。本尊阿弥陀如来。神仏習合の名残として、本尊前には御神鏡が祀られています。山門の向かって右手にある地蔵堂に祀られている地蔵尊は、「泥足地蔵」あるいは「汗出地蔵」と呼ばれる半跏像です。伝教大師最澄の作と伝え、滋賀県坂本に祀られていましたが、天正十五年〔一五八七〕に正誉上人により、善想寺にもたらされたと伝えられています。毎月二三日に祈願法要をおこない、地蔵尊の仏前で祈願文を読み上げています。

泥足地蔵・汗出地蔵と呼ばれる由来は、善想寺のホームページ http://zensoji.or.jp/jizo/に詳しく説明されていますので、すこしだけ変更して引用します。『新版京のお地蔵さん』（竹村俊則著、京都新聞出版センター、二〇〇五）にも同様の趣旨の説明が載っています。

泥足地蔵尊のいわれ

泥足地蔵尊のいわれは、滋賀県坂本村にまつられていた頃のもの。日照り続きで村人が難渋していたとき、作兵衛が日頃拝んでいる地蔵尊に三日三夜祈念すると、効あって大雨が降りました。村人は無事田植えを終えることができましたが、作兵衛は無理がたたったのか、腹痛のため田植えができませんでした。ところが、作兵衛が翌朝見にゆくと、作兵衛の田にも稲が植わっておりました。村人に聞くと、一人の僧が、懸命に田植えをしていたとのこと。

不思議に思いながら、地蔵尊にお礼参りにゆくと、腰から足にかけて泥にまみれておられました。これを見て、作兵衛「かの僧はこの地蔵尊で、身代わりに田植えをなさったのだ」と悟りました。このことを伝え聞いた村人は、泥足地蔵尊、身代わり地蔵尊と呼び、深く信仰しました。

善想寺

泥足地蔵

門標

六角通（ろっかくどおり）大宮（おおみや）西入（にしいる）　六角大宮町（ろっかくおおみやちょう）　④

汗出し地蔵尊のいわれ

汗出し地蔵尊のいわれは、善想寺門前にまつられた京でのこと。文化五年秋、堺町の勘兵衛は妻の難産で一日一夜お祈りしていると、家から安産の報せがありました。地蔵尊に御礼を申し上げると、お顔一面に玉のような汗が流れていました。

それ以来、汗出し地蔵尊、身代わり地蔵尊と呼ばれ信仰されてきました。そのほか諸願成就は数え切れません。

満福寺と善想寺、さらに六角通を挟んで向かいにある光明院も、上述の洛中絵図（京都大学付属図書館蔵）の同じ場所に記載されています。したがって、一六四二年頃には、これらの寺々はすでにこの場所に建っていたわけで、分秒を問題にする日常を離れて、時間の感覚が変わってくるのを感じます。この図では、満福寺の西側は水路になっていて、如来寺はありません。

善想寺の東隣のお宅に、町名看板「六角通大宮西入六角大宮町」④が掲げてあります。

町名は「六角大宮町」。隣の善想寺（および満福寺）は「三条大宮町」で、ここに両町の境界があることがわかります。さらにいえば、上述の如来寺は「因幡町」で、三条大宮町と因幡町の境界が満福寺と如来寺の間にあります。いずれも、「六角通大宮西入」ですから、こんがらがってしまいますが、京都の地名ではよくあること。種明かしをすると、六角大宮町は大宮通の両側町（縦町）。三条大宮町も大宮通の両側町（縦町）ですが、地図をみると善想寺と満福寺を含むように変則的に張り出しています（寺地なので、六角通を挟む横町を作るまでもなかったのでしょう）。因幡町は、大宮通の一筋西の通り（神泉苑町通、旧櫛笥通）の両側町（縦町）です。ちなみに、如来寺のほかに、上述の正運寺も因幡町の所在です。

■ 六角獄舎跡

如来寺のある辻から西の六角通は、鉤形にずれています。北側は武信稲荷神社。南側に建っているマンションの門の東脇に石碑が二基。「日本近代医学発祥之地」と「勤王志士平野國臣外数十名終焉之地」が、並んで建っています（中京区六角通神泉苑町西入因幡町）。さらには、マンションの門を入ったところ、敷地の東側に横長の碑「山脇東洋観臓之地」と自然石に彫り込んだ「殉難勤王志士忠霊塔」が建っています。

ここは、江戸時代の六角獄舎の跡地です。宝永の大火（宝永五年〔一七〇八〕）のあと、この地（六角通大宮西入）に移転したために、この名があります。二組の記念碑が建っているのは、江

六角獄舎跡（山脇東洋碑と勤王志士殉難の碑）

戸時代に六角獄舎を舞台とした二つの事件に由来しています。

■　山脇東洋観臓之地

「山脇東洋観臓之地」の下部に嵌め込まれた銘文に、一番目の事件のあらましが書かれていますので、引用しましょう。

近代医学のあけぼの　観臓の記念に

一七五四年　宝暦四年閏二月七日に山脇東洋（名は尚徳　一七〇五～一七六二）は所司代の官許をえて、この地で日本最初の人体解屍観臓をおこなった。江戸の杉田玄白らの観臓に先立つこと十七年であった。この記録は五年後に『蔵志』としてまとめられた。これが実証的な科学精神を医学にとり入れた成果のはじめで、日本の近代医学がこれからめばえるきっかけとなった。

東洋のこの偉業をたたえるとともに観臓された屈嘉の霊をなぐさめるためここに碑をたてて記念とする。

一九七六年三月七日

日本医師会
日本医史学会
日本解剖学会
京都府医師会

山脇東洋（宝永二年〔一七〇六〕～宝暦一二年〔一七六二〕）の書いた『臓志』については、京都大学付属図書館蔵　富士川文庫セレクトから影印を見ることができます。その中から、観臓に至る経過を抜き書きしておきましょう。

寶暦甲戌年閏二月七日。有レ行二刑於西郊一。處レ斬者五人。京兆尹若狭藩酒公侍醫、原松庵、藤有信、杉玄適、吾黨也。請二屍於官一、於二獄中一解レ之、使二余就観一焉。置二屍廳前藁席上一、令二屠者解レ之。

『臓志』、山脇東洋、宝暦九年〔一七五九年〕
京都大学付属図書館蔵　富士川文庫セレクト
http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/fuji/index.html

（書き下し文）

宝暦甲戌年閏二月七日。刑西郊に於て行ふ有り。斬処五人。京兆尹若狭藩酒公侍医、原松庵、藤有信、杉玄適は、吾が党なり。屍を官に請ひ、獄中に於て之を解し、余をして就きて観せしむ。屍を庁前の藁席上に置て、屠者をして之を解せしむ。

「西郊」は、当時の処刑場「西土手御仕置場」のことで、現在の西大路太子道のあたりにありました。「京兆尹」は、左京大夫（または、右京大夫）の中国風の名称。「若狭藩酒公」は、小浜藩主酒井讃岐守忠用（享保七年〔一七二三〕～安永四年〔一七七五〕）のこと。侍医としてあげられている三名は、名前を中国風にしていますが、原松庵、伊藤有信、小杉玄適（享保一五年〔一七三〇〕～寛政三年〔一七九一〕）のこと。

当日、西土手御仕置場で処刑されたのは五名で、そのうちの一体（屈嘉と呼ばれる罪人のもの）が六角獄舎へ運ばれました。首なしの亡骸は、獄舎の前庭で藁筵に横たえられ、屠者（屠殺を専門にしている者）の手で解剖がおこなわれました。この解剖を、

京都所司代に願い出たのは、小浜藩の藩医三名。伊藤有信と小杉玄適は山脇東洋に師事していましたので、山脇東洋が「吾が党なり」といっているように、この解剖に立ち会ったのは日頃の研鑽仲間です。ちょうどこの時期、小浜藩主の酒井忠用が京都所司代（在任は宝暦二年〔一七五二〕～宝暦六年〔一七五六〕のわずか五年）だったのが幸いしました。山脇東洋が常々「臓器の配置を実地に解剖によって確かめたい」という希望をもっていたところに、主君が京都所司代になったのをよい機会に、弟子の伊藤有信、小杉玄適が侍医仲間と相図って申請して実現させたのでしょう。何ごとにも「時が満つる」ことはあるもので、意図（志）があるところには、偶然が重なってあたかも必然とみえる瞬間がありますね。

『臧志』では、解剖の詳細を記したあと、師の後藤艮山から受け継ぎ発展させた「実証に基づいた古医方」の立場が表明されています。次に引用しておきましょう。この記述のあと、解剖図が載せられています。

尚徳幸遭遇文明之運。稽焉、以復古之學、徵焉、以経験之實。是何幸也。於是記所懐云爾。甲戌閏二月

『臧志』、山脇東洋、宝暦九年〔一七五九年〕

（書き下し文）

尚徳、幸に文明の運に遭遇す。稽るに、復古の学を以てし、徴るに、経験の実を以てす。是何ぞ幸なるや。

是に於て親しく見る所を記し、併て所懐を述すと云爾。

甲戌閏二月

尚徳は、山脇東洋の字です。東洋の息子の山脇東門（元文元年〔一七三六〕～天明二年〔一七八二〕）も医者で、父の後を継ぎました。古医方にこだわらず、さらに実証に基づく方向を推し進めました。安永四年〔一七七五〕版『平安人物志』の学者の項に、山脇東門の名前が見えます。並んで記載されている山脇東海は、東門の息子です。

橘陶　字大鑄号東門　堀川通丸太町上ル町　山脇道作
橘豹　字子班号東海　同所　山脇元冲

山脇東門は、明和八年〔一七七一〕女性死体の解剖をおこない、『玉砕臓図』を著わしています。新京極三条の誓願寺は、山脇家の墓所ですが、墓地には、山脇家で解剖した十四体の供養碑が建っています。

■　勤王志士斬殺事件

マンションの敷地内の「殉難勤王志士忠霊塔」の脇の壁に京都市による駒札が掲げてあり、六角獄舎でおこった第二の事件のあらましを記しています。次に引用しましょう。

平野国臣殉難の地

幕末尊王攘夷派の指導者平野国臣が処刑された所である。この地はもと「六角獄舎」があったところで安政

の大獄以後は、多くの政治犯が収容されたので会所ともいった。

国臣は、もと福岡藩士で、尊王攘夷運動に参加して脱藩し、生野の乱に挙兵して捕えられ、元治元年（一八六四）一月十七日ここに収容された。ところが同年七月十九日長州藩兵の入京に端を発した禁門の変（蛤御門の変）によって、京都市中の大半が兵火に見舞われ、その翌日火勢が「六角獄舎」に迫るや、幕吏は獄中の尊王攘夷派の志士たちを斬った。この時斬られた一人が国臣である。この難にあったものは、国臣のほか、古高俊太郎、長尾郁三郎、水郡善之祐ら三十数名にのぼった。

なお、当地は、宝暦四年（一七五四）に医師山脇東洋がわが国で初めて死体解剖を行った所とも言われ、付近には記念碑も建っている。

京都市

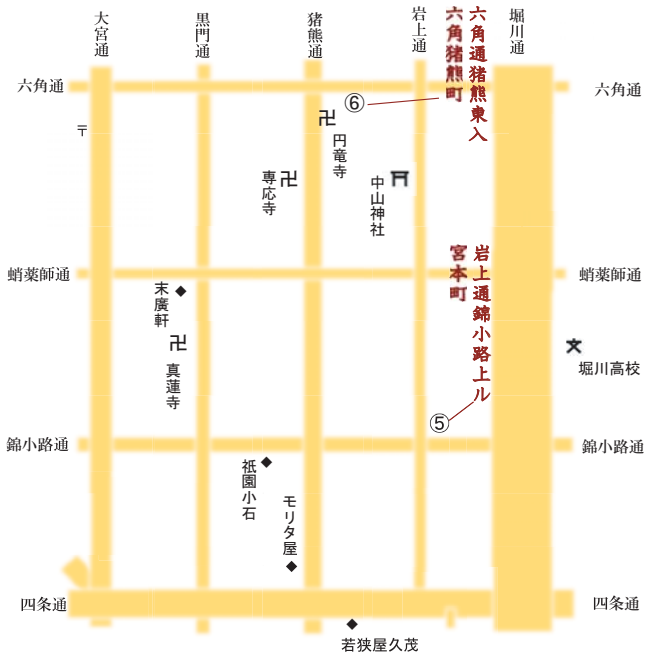
この説明の中にあがっている平野国臣（文政一一年〔一八二八〕～元治元年〔一八六四〕）は、福岡藩を脱藩したのち、勤王攘夷派志士として活動しました。寺田屋事件（文久二年〔一八六二〕）のあと、福岡藩の牢に収容されたが、文久三年〔一八六三〕に釈放。六角獄舎に収容されていたのは、駒札の説明にもあるように、生野の変（文久三年〔一八六三〕）で敗れたため。

古高俊太郎（文政一二年〔一八二九〕～元治元年〔一八六四〕）が、六角獄舎に収容されていたのは、池田屋事件に関係があります。池田屋事件（元治元年〔一八六四〕六月五日に、長州藩・土佐藩の尊皇攘夷派を新選組が襲った事件）は、新選組が名をあげるきっかけとなった事件です。薪炭商枡屋（四条小橋上ル）として身分を隠しながら長州藩の間者として活動していた古高俊太郎を、新選組が捕縛し、拷問の末、クーデター計画（そんな大げさなものはなかったとする異説もある）を白状させたことが発端です。と通説に従って書きながらも、古高がどの程度自白したのかに関して、どうも腑に落ちないことがあります。古高の捕捉を受けて、計画の練り直しを協議する会議（古高の救出策を練っていたのと異説もある）がおこなわれたのが池田屋（三条通木屋町東入）。捕らえられた古高俊太郎は、六角獄舎に収容されました。

禁門の変によるどんどん焼で、六角獄舎に火が迫ったときに、これ幸いと勤王派の志士三七名を斬殺したというは、当時の基準に従ったとしても蛮行であったことにはかわりはありません。火が迫ったときには、未決の囚人を解き放つというのが慣例になっていたはずなのに、幕吏はこの慣例に反する処置をおこなったわけです。しかも、六角獄舎には実際には火が達しなかったのですから、なにをかいわんや。

■　強制疎開の跡

堀川通の一筋西の通りは、岩上通と呼ばれています。まず、町名看板「岩上通錦小路上ル宮本町」⑤を見つけました。本シリーズ第21回で、太平洋戦争末期におこなわれた強制疎開についてふれましたが、今回めぐる地域（六角通～四条通の間の堀川通）でも大きな爪痕を残しています。この看板は、堀川通沿いの強制



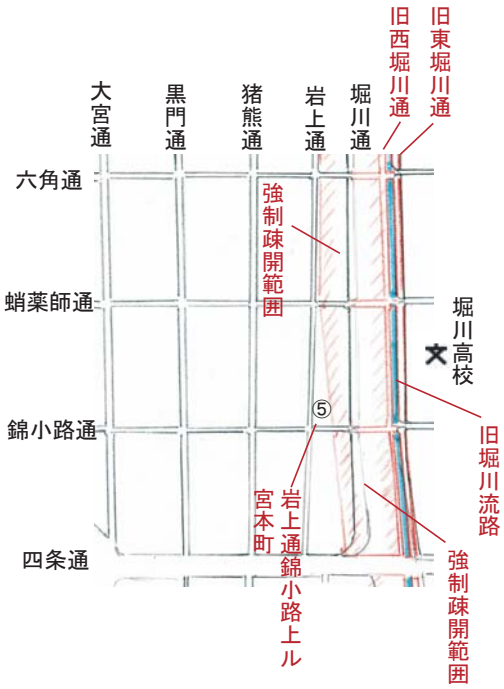
町名看板の所在（四条堀川西北の地域）

岩上通（いわがみどおり）錦小路（にしきのこうじ）上ル（あがる）　宮本町（みやもとちょう）　⑤

疎開を逃れて辛うじて残った一枚です。

この状況を説明するのは図解した方がわかりやすいので、現在の地図に強制疎開の範囲を書き込んだ略図を作りました。書き込んだ強制疎開の範囲は、国土地理院の国土変遷アーカイブ（空中写真閲覧 http://archive.gsi.go.jp/airphoto/）から閲覧できる敗戦直後（昭和二一年〔一九四六〕）の航空写真（写真名 USA-R275-A-7-132）をもとにしています。

略図でわかるように、東堀川通は無傷ですが、西堀川通と岩上通で挟まれる南北部分に取り壊しのあとが見られます（現在は、強制疎開の範囲の西側の一部は戻されて建物が建っています）。そののち（昭和三八年〔一九六三〕頃）、京都市の道路整備の一環として、堀川が暗渠化されて、東堀川通も現在の堀川通の歩道部分になっています。かって東堀川通の川沿いにチンチン電車が走っていた痕跡さえもありません。町名でいえば、堀川通四条上ルの錦堀川町（西側は、二棟のマンションが建っているところ）が、かろうじて両側町として残っているだけで、四坊堀川町の西



堀川通の六角～四条間の強制疎開（概要）

半分、壺屋町の西半分（江戸時代の西壺屋町）、橋浦町の西半分（江戸時代の西橋浦町）は現堀川通の下に埋もれてしまい、東半分だけの片側町になってしまいました。

岩上通を北上するとわかりますが、四条通から蛸薬師通の間は、西側はもちろん、東側にも京町家が残っています。町名看板⑤は、そのような京町家の一軒に掲げられています。強制疎開を逃れた、貴重な一枚というわけです。ところが、蛸薬師通から上（かみ）の岩上通では、西側には京町家が残っていますが、東側は、鉄筋コンクリートの建物が増え、いわゆる京町家は全くありません。これは、敗戦直後航空写真の強制疎開の範囲を反映しています。

強制疎開を総体的にまとめると、上記のように血の通っていない無機的な記述になってしまいますが、実際に立ち退きを迫られた人々の辛苦はたとえようのないものだったと想像できます。現在の堀川通は自動車が間断なく走っていますが、便利さを享受するだけでなく、つい半世紀前に強制疎開による犠牲があったことを頭の隅に置いておくべきでしょう。

■　中山神社（岩上神社）

岩上通の名は、中山神社こと岩上神社（中京区岩上通蛸薬師上ル岩上町）に由来します。岩上は、岩神や石神とも表記します。所在は、町名看板⑤から、北へ進んだところ。鳥居は東面しています。鳥居の向かって右手にある門標には「中山神社」、鳥居の扁額は「岩上宮」、境内の拝殿の扁額は「岩上大明神」となっています。鳥居の左手には、「中山内府威跡地」の石標が建っています。

『都名所図会』では、次のように説明しています。

石神社（いはがみのやしろ）　石神通三條の南にあり。祭所（まつるところ）　豊石耳命（とよいはまどのみこと）　奇石窓命（くしいはまどのみこと）なり。古は此地中山忠親卿（このちなかやまただちかきやう）の亭（てい）なり。故に中山（なかやまの）社と称す。

鳥居の横に立っている駒札は、やや詳しい説明が記されています。

中山神社（なかやまじんじゃ）

中山神社（岩上神社）

延暦十三年（七九四）に桓武天皇の勅命により建立されたと伝えられている。素戔嗚尊を主神とし、朝夕、内裏の門を守護するという櫛石窓神、豊石窓神の二神を合祀する社で、石神（岩上）神社ともいわれる。

嵯峨天皇の後院（退位後の御所）冷泉院の鎮守社として崇められたと伝えられ、慶長七年（一六〇二）、二条城造営により現在地に移転したが、天明八年（一七八八）の火災にかかり、現在の社はその後再建されたといわれる。社名の中山神社は、この地が鎌倉時代の内大臣中山忠親の邸跡であったためと伝えられる。

京都市

中山忠親（天承元年〔一一三一〕～建久六年〔一一九五〕）は、平安末期から鎌倉初期の公卿。有職故実に詳しく、日記『山槐記』を残しました。また、『水鏡』の作者ともいわれています。平安末期は平家に近い立場で活動し、平家が敗れたのちは、有職故実にあかるいことを買われて、源頼朝にも用いられました。

『山城名勝志』巻四には、『山槐記』の治承三年〔一一七九〕正月三日壬戌の条を引用して、次の記述があります。

中山忠親卿亭

山槐記云、治承三年正月三日壬戌、去年十二月廿九日、渡二此亭一、三条堀川立二廳屋一、依レ無二残日一無二廳始一今日所レ始也、

（書き下し文）

中山忠親卿亭

山槐記に云く、治承三年正月三日壬戌、去年十二月廿九日、此亭（三条堀川）に渡り、廳屋を立つるも、残日なきに依りて、廳始なし。今日、始むる所なり。

ちなみに、治承三年〔一一七九〕は安元の大火から二年後（第1回参照）。中山忠親は安元の大火で焼け出されているので、この年に新築なって引っ越してきたのかもしれません。廳屋は仕事部屋、廳始は仕事始めの意か。正月一九日に、中山忠親は右衛門督・検非違使別当を辞任し、一一月一七日に春宮大夫（東宮は言仁親王、のちの安徳天皇）。治承四年〔一一八〇〕、以仁王と源頼政（第10回参照）の挙兵。治承五年〔一一八一〕、平清盛死去。これ以降は、源平の争乱。朝廷の内部から臨場感あふれる記述によって、『山槐記』は、この時代の第一級の史料です。

伝承というのは移ろいやすいもの。遷座した石神社は、いつの頃からか、中山忠親邸の鎮守であるかのように混同されて、中山神社の別名をもつことになったのでしょう。もしかしたら、「中山内府威跡地」の石標は、中山忠親邸跡の伝承と二条城造営のときに遷座した石神社とは関係がないことを示すために、わざわざ建てたのかもしれません（背面の建立日などをみることができないのは残念です）。七九四年創建と伝承される石神社は別のところにあったことは確かなので、候補地をめぐる機会があったら改めて触れることにしましょう。

六角通に出て、西へ進むと南側に、「六角通猪熊東入六角猪熊町」⑥ の町名看板。

六角通　猪熊　東入　六角猪熊町　⑥

『京町鑑』（宝暦一二年〔一七六二〕刊行）には、猪熊通の縦町として、「（猪熊通）六角下ル、六角猪熊町。此町に専應寺といふ西門徒有。又圓龍寺と云東門徒有。」と記載しています。専応寺（専應寺）と円竜寺（圓龍寺）は、現在も同じ場所にあります。『京町鑑』が刊行された一七六二年にはすでに同じ場所にあったのですから、古いものですね。

最後に、このあたりの和菓子屋を紹介。蛸薬師通大宮東入畳屋町「末廣軒」。十一月のお火焚祭にあわせて、「お火焚饅頭」。紅白の饅頭に火焔玉の焼印を押したもの。錦小路通猪熊西入には、京飴の「祇園小石」。定番の「家伝の京飴」のほか、四月はさくら飴、五月は新緑茶飴など、月がわりの飴も発売。

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (http://xymtex.com) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第24回）2010/04/18

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 http://xymtex.com/